

# 落合直文論 (二)

片 桐 顯 智

4

落合直文の短歌の新資料について述べてきたが、前稿につづくものとして「明治文学全集」第四十四巻落合直文編（昭和四十三年十二月）に、直文の新資料短歌八十九首を収録紹介した。もちろん、前稿において発表した「明星」「国文学」の直文短歌全部も「明治文学全集」に収めたので、その八十九首のほかに三集（「落合直文集」「萩之家遺稿」「萩之家歌集」）に未収録の新資料十四首がつけ加えられることになる。したがって、落合直文短歌の新資料は、作品数からいうと一〇三首の多きにのぼることになる。

さて、本稿では前稿を承ける意味で、新資料短歌の解説をつづけることにしたい。一〇三首の作品で、随筆、紀行文にある歌は、三集の短歌篇に収められていないことから新資料として取り扱った。「軒のしのぶ」他の紀行文にある三一首である。「明治文学全集」の短歌篇の終尾の一首、  
渡辺直子刀自八十の賀に

落合直文論

はたとせのよはひをへなばもとせのいはひの歌をまたまゐらせむ  
これは、白田甚五郎氏が旅中短冊に記されたものを発見して教示してくれた作品である。さらに全集に収めた新しい資料について述べれば、「宮城野集」の三首は、湯本喜作氏の発表したもので、塩釜神社の押木耿助氏提供資料といえよう。「明治歌集」中の「寄巖祝」は、熊谷武至氏の発見資料であるが、「初冬」は別に発見した作である。ただ佐々木信綱編の「明治歌集」と「千代田歌集」を通覧したが、「寄巖祝」は目にとまらなかったもので、熊谷氏発表資料をそのままとりあげた。小泉三氏、福島タマ両氏の発表資料は、私の調査と重複しているが、小泉氏の場合は、「東洋学会雑誌」四首の全部をつくしていない。「莫告藻」一首は、藤田福夫氏の発見にかかるものである。松田常憲氏は「国学院雑誌」を除いて、雑誌関係資料についてはもっとも多く涉獵し、蒐集整理されたが、新旧校合の労をとっていない。「国学院雑誌」は、福島タマ氏が、示唆しているが、新資料としては二首に過ぎない。その他「しからみ草紙」「めさまし草」「こころの華」「古今文学」「新声」「文海」

「歌学」に新資料作品が二十二首「読売新聞」に一首ある。

「書翰より」は、直文の書翰の中から発見した歌である。直文書翰は「落合直文先生書牘集」（浅香社在京同人編、昭和八年十一月）一一一篇「補遺篇」（「水甕」昭和四一年）三十六篇、計四十七篇の他に、その後数篇の追加発表が「水甕」誌上に掲載されている。したがって、公表された直文書翰は一四〇篇くらいとなっている。その後落合秀男氏所蔵の直文書翰約五〇篇の未発表資料を入手することができた。落合家の好意によるもので、この書翰資料は、いずれ公表したいと思っているが、そのうち四篇（鮎貝盛房、鮎貝俊子、落合竹路、落合直幸宛）を「明治文学全集」に収めたわけである。さて「書翰より」の歌は、次の直文書翰からとったものである。書翰とともに新資料として掲げてみよう。

樽陶しき天気如何くらさせ給ふらむ扱過日は御手紙下され候ところ都合ありておそくなりまことに相すまざることに御座候この岡本君の会の演舌のこといかにもくりあはせ出席の都合にいたさむと思ひ候へども諸学校試験中にてとてもこのひま無之候条よきに御ことわり願上次回ころにはなにかと都合の上一席の演舌可仕候五島の箱館の番地はききおよひなし講究所の大貫と申者しり居候おもむきなればそのうちききおき御しらせ可申候先月三十一日都をたちいでこの地にまゐり居候この地は大井川のほとりにてまことに景色もよろしきところに候へばしたがひて吹く風もすずしく身体も大にすこやかに候まます御よろこび下されたく候

真幸直道二人へは別に手紙をやらす候本年はことに勉強するやう御伝

言願上候

尋鶯

しつの男かをしへしあたりきてみればまことになきぬ谷のうくひす

閑居雪

よの人にとはれまほしくおもひしは雪ふらぬほとこのころなりけり

朝雪

吾も子にねやの妻戸をあけさせてねながら今朝の雪をみるかな

冬恋

こひく／＼て秋もくれけりこの冬はわがたもとよりしくれそむらむ

おなしく

わがせこをなに／＼つけてかともめまし今朝は雪さへふらぬなりけり

埋火

埋火をはなれぬものは吾妹子の手飼のねことわれとなりけり

新年宴会

常のまぬ酒にもゑひてたのしきはとしのはしめのうたけなりけり

一月

このまとあかしこのうたけこの月はかかたゑひてくらすなりけり

おなしく

よこといひよこといはれて中々にこの一月トキはいとなかりけり

都雪

とけぬまに上野のあたりゆきてみむあけかたしらく雪ふりにけり

おなしく

この朝け大路をいそく音するは隅田の雪見の車なるらむ

故郷雪

ふる雪のかゝれるまてになりにけり門出にさしし青柳の糸

禁辺の雪

ふりつもる雪のあしたは九重もみかきの外もへたてさりけり

冬植物

枯尾花をれふす野へにひとつ松みつの杉のみかはらさりけり

雪満群山

黒髪も赤城の山も雪ふれはこゝしろ妙にみゆるなりけり

雪夜夢

ふるさとかよふをみれば冬のよの雪は夢路にさわらさりけり

朝雪

しら雪のふるとしりせはこの朝け暁おきもしなましものを

野若菜

つみにきて嬉しきものはあしたつのむれゐる野へのわか菜なりけり

おなしく

石上ふる野のみ雪かきわけてつめとわか菜はわかななりけり

以上

いつれも近来よみ出候者なり御一覽下され度何にも申残おままひ迄

早々 かしこ

直文

直文書翰の他の一通にも、次の歌がある。

このころよみたるうたども母上まで御ととけ申上候に付御らむあるべしきゝたるうたとも故に

高さき正風

おなしくは風のいりたる枕せむひと夜の夢のすゝしかるへく

伊東祐命

一夜ねて野守のおちにきゝしかなふみにもれたるむかしかたりを

皇后宮の観花の御宴にはへりて

とふ蝶のかるき身ながら九重のみ園の花になるゝ今日かな

私の四海清の歌左に

塩沫のこりし国へはいかならむ波風清し浦安の国

えぞかすむ千しまのおきのはてまでも君が恵のひろめかるらむ

見渡せば世をすみよしの松風もたえてのとけき四方海原

から人もかほかちほさすよせくなり波風きよきやまとしまねに

いにしへにかゝるためしはありそ海のたえてきこえぬたみの音かな

植松翁の死去せられたるをり

こむ春はみ杖をとりてすみ田川花見のみ供つかへむものを

あなくやしふみよむわさもうたよむも手向にとてはまなばさりしを

をりにふれて

少女子がまりもてあそぶ袖みてもかへらぬひとのうらめしきかな

近日詠み候歌共数多有之候へともこれは母上様へ御書状差上候節御託

申上べく候石森和男事先日仙台の家が焼失候趣にて近日帰郷の見込に

御座候実の毒千万其他在京の諸氏は皆無異御安神なし下され度候

猶寒気烈しく候間折角御自愛專一に奉願候燈下にて相認候へば乱筆の  
段御恕下され度早々不一

二月十五日認

龜二郎拝具

父上様御膝下

さらに、短歌のある書翰は、次の一通であるが、写しとってみよう。

暑気愈難凌相成候処益御安泰御座成され候段奉賀候次に当方些々無異  
に候間乍憚御安意さし下され度候陳は二十三日御差出の御書面二通昨  
二十五日来達難有拜見致候私出京の事は何れにも御帰家遊ばされの後  
の後に可仕候就ては尋常の俗吏に相成候には夫々依頼致し候処も有之  
候へども學術を以て奉仕候には先以て久米あたりの周旋ならむには適  
当と存居候聞父上よりも同人に御依頼なし下され度奉願候私よりは  
己に書面（四字不明）書物類虫乾は三四日以前よりはじめをり候○東  
京浅草公園神堂好社員藤井行磨なるより書面納め居候是は兼て御承知  
もあらせられつらむ柿本人丸の奉納また並に寄附金の件なり又小林与  
兵衛とか云ふ者より葉書とときぬ兼て御負担相成候国郡主任者及び先  
進者など当月三十一日迄に間に合候様おくりくれとの趣に御座候小林  
は東京赤坂表二百十九番地にて神代復古誓願發起人なり又石森の叔父  
なる新井政より石森和男の嫁のことに付御願の書面参り居候就ては石  
田菘の孫女なる者よろしき女有之候に付母上様の御媒にてもらひ候  
事にとりきめ候今日婚禮の事に決定致し候女姓は吉田父の名は才輔と  
申人にて石田の婿に御座候石森右に付教会所の向へ転り居候此段御承  
知なし下され度宇野と申すうたよみより御見舞として砂糖とときたり

是亦御承知下され度候先日婦人歌会の節よみたるうた御なぐさみまで  
に呈上候

扇

うちならず扇の風をこの夕音せぬ庭の虫にかさばや

松風もたえて音せぬ夏日はならず扇ぞいのちなりける

○松岩の実父は維新前は太郎平と申居候へども明治になりてより盛房  
と称居候家兄は盛徳といひ当時気仙沼の戸長拜命致居候に付同処觀音  
寺に寄留せり松岩へはをりをりかへるのみ坂野の叔母（年三十三）は  
実父の妹に御座候之来同家布施は敬神家に御座候へば御通行の際は御  
立寄下され度候○昨日は松野の六年忌にあたり候に付かたばかりのま  
つり致候御よろこび下され度何にも申残早々かしこ

七月二十七日

龜二郎再拜

父上様 おもとへ

この書翰にある題詠「扇」二首は、三集にも見られる作であって、新  
資料とは言えない。直文書翰によって新らしく発見された歌は、二九首  
のうち二一首といえよう。なお、引用の歌は、直文直筆の表記のままと  
した。本稿からの論旨からはずれるが、直文書翰は、直文の生活内容や  
人柄を知るのに貴重な資料である。実父鮎貝盛房、養父落合直亮、直文  
兄弟、松野、竹路との関係、入営時代などが明らかになる点をふくんで  
いる。一例を示せば、落合直亮の養子となり、龜次郎（龜二郎）の名を  
直文と呼称したのは何時ごろかについても、判然としていない。小島吉  
雄氏の推論もあるが、書翰をみていくと、明治十九年入営中に、落合直

文の署名がある。したがって、入管中に直文の呼称を用いており、二十一年ころから、著作に用いていることが判明するのである。

5

直文短歌の新資料について、「明治文学全集」の落合直文の短歌を解説し、それに関連して未発表書翰三通を紹介してきたが、さらに落合家所蔵の直文筆短歌にふれてみよう。これは書翰ではなく断簡であるが、全部を写しとってみよう。欠字は破損で不明なので（ ）印に私の推定の文字を入れてみた。

田家春

たねひたす田中の井戸に影みえて水のそこにもひばり鳴なり

隣家梅

わがやどにとり梅は雪をれておもはぬ花のさかりをそみる

立春天

大そらは梅鶯のほかなれは音も香もなき春や立らむ

閑中春雨

池水にみえてのみふる春雨は音きくよりも淋しかりけり

山中花

□さとは花のこころもやすからむちるもちらぬもいふ人そ△△(□山

△なき)

岸頭待舟

□きかへるわたりの舟をまつほとにまつひとおほくな△△△△△△

(□△りにけるかな)

寄鳥恋

かねのねは猶よひのまといひなさむいつはりかたき鳥のこゑかな  
かくれがにつけるをり

或人の三回秋露

秋はぎにおける露こそかなしけれ玉のゆくへをみるこゝちして  
なにとなくおもひつゝけたる

朝夕に人はくれともおもふこといはるゝともはすくなかりけり

暮春鶯

今さらに春をときはとねかふらむ松にかへりて鶯の△△(△なく)

朝更衣

朝風のさむしといひて花そめの春の衣は下にそいてきめ

みな月の末ほとゝきすをきゝて

まちくゝてきゝつるよりもほとゝきすおくれし声のめつらしきかな

夏風

花によりあまりに人やいとひけむまたるゝ風のふかすもあるかな

窓辺螢

嬉しくもほたるのかけのみえしかなさしわすれたるまとのひまより

夏夜満風

かせをのみいれてねにけるねやのとをまつひとありと人やみるらむ

松下水

なかれきて松のこかけになるときは水の心も涼しかるらむ

隣家槿花

隣にもとなりのものとおもふらむこの中かきの朝かほの花

京にのほりける夜舟にて

夢なからむしの音ちかくきこゆなりかたのやすくるよとの川舟

林間紅葉

□□□□き時雨の雨のふるときはときはのもり△△△△△△△△(不明)

古宅橋

いくたひかやとのあるしはかはるらむ年へてみゆる△△△△たち花(△

やどの)

立秋

秋きぬとまつしるものはなみたにてふきをられたる萩<sup>きき</sup>の上風

若竹

わか竹のすなほならぬはなかりけりいつよりふしのくるひそめけむ

山家暮秋

山さともうきはうきよにことならてさらになしき秋のくれ哉

月前時雨

久かたの月をのこしてくもりけりこゝろありける村時雨哉

古河千鳥

妹か手にわか手さしかへまくらかのこかのわたりに千鳥鳴なり

歳暮

ひと日つゝくれて来にける年なれとけふ行ものゝこゝ地こそすれ

初恋

これなくはなにゝつけてかしらせまし嬉しくもれし涙なりけり

寄風恋

いかにせむたよりをたのむ風たにもおもふかたには吹ぬころかな

虫声非一

口といへはおなしあはれをさまさまの声にたても虫の△△△△△

(□も△なくかな)

風鈴につけたるうた

さためなき風にまかするかねの音にいりあひもなくあかつき□な△

(□も△し)

何にとなきうた

われのみや夜はねられぬといてみればそらく月もひとりすみけり

古寺紅葉

よの中にこゝろはそめぬ山寺の庭の梢もみちしにけり

山家門

山さとはかきもかこひもなかりけりいりくるかたをかたとさためて

船中眺望

こきいてゝ舟よりみれば住なれし家のあたりもめつらしき哉

たるうたの中に

ともかくも心ひとつにさためてむうしとおもへはうき世なりけり

〃

わかこゝろわか心ともおもはれすおもひのほかのおもひせられて

扇の画杜若

手にならず扇の上のかきつはたいつれかさきにひらきそめけむ

山里深雪

雪ふりて年のくれぬる山里は春よりほかにまつひともし

あかつき

と□ふま□老ぬとおもはねとねさめかちにそ夜△△△△△△△△

(□△△不明)

この他に、熊谷直好の歌を写したものの(明治十八年)や「土御門帝の御詠」として三首記したものが残っている。ここに引いた歌四〇首は、不明の箇所があるものもあるが、すべて直文の作と認められる。時代をいえば、直文作歌生活の第二期である。「村雨日記」時代を第一期とすれば、上京、大学中退、入宮、教師といった明治十六、七年ころから二十三年ころまでの期間が第二期である。直文の蓄積期であり準備期ともいえよう。明治二十四年には、改良的意図を反映した詠歌書「新撰歌典」を出版し、二十六年二月には「浅香社」を結成し、歌文革新を目指し多くの門弟を養成することになる。

断簡に残された四〇首の歌は、すべて題詠であって、第一期の歌風を継ぐものであり、新味は認められない。また、境地は、当時の直文の他の題詠歌に通じるものであり、その流麗典雅な歌調へのきざしも何うこともができる。「落合直文集」に見える初期題詠の歌風を示せば、断簡の題詠歌との類似性を知ることができよう。

旅夢

ふるさとのいよいよ遠くなるままに夢はいよいよ見え増りつつ

風前柳

青柳に風吹く折は池水の底のかけさへなびくなりけり

秋夕

誰もかくわがごとものをおもふかと問ひても見ばや秋のゆふぐれ

さて、直文短歌の新資料として断簡に見える歌は、四〇首であるが、そのうち八首は文字不明の歌である。しかし、それをさておき四〇首を新らしい資料と見るならば、直文短歌は新らしい編纂のなかに入れるべき歌は、一〇三首に四〇首、計一四三首となるわけである。直文短歌の歌風やその変遷については、他稿で述べたので省くこととし、ここでは新資料としての直文短歌を紹介するにとどめたい。こう見てくると、「萩之家遺稿」「萩之家歌集」「落合直文集」三集の短歌は、その作品数で数多く落ちていいるし、表現や掲載方法についても問題があって、完全なものとは言えない。落合直文自身の編纂したものでないからである。したがって、直文短歌を論じ、その評価をするためには新らしく編纂しなおす必要がある。直文の短歌ばかりでなく、さらに、歌論歌話においても同じことが言えるし、また評論、物語の分野でも未発表の資料が多いから、新編の「落合直文全集」が必要ということになってくるのではなからうか。最後に、直文書翰断簡の読解を煩わした本学飯島実氏と、資料提供の労をとられた落合秀男氏両の氏に謝意を表したい。